

2023 年度は、e-learning システムを利用した学生による授業評価を前期および後期で実施した。前期科目は、全 84 科目中、通年科目を除く 51 科目が授業評価の対象科目だったが、選択科目の 1 科目は選択者がいなかったため、合計 50 科目だった。演習などを含め対面講義も増加し、講義の内容に応じて遠隔若しくは登校などの講義方法を用いて展開された。遠隔授業では、繰り返し講義視聴ができるようオンデマンド方式を、資料を共有したプレゼンテーションなどの場合はオンラインや e-learning 機能を活用した方式で展開された。授業評価は通年で同 URL から回答が可能となり、教員には実施率を挙げるために講義内で授業評価時間を確保するよう依頼した。

評価項目は計 20 項目で構成されている。項目は、「1.授業の改善計画の実施」に関する 1 項目、「2.授業の技法」に関する 6 項目、「3.授業の内容」に関する 6 項目、「4.自身の学習態度」に関する 4 項目で、うち 1 項目は準備学習の時間数を回答する項目とした。「5.授業での ICT の活用状況」に関する 3 項目とした。

回答項目は、「1：まったくそう思わない」、「2：あまりそう思わない」、「3：ある程度そう思う」、「4：非常にそう思う」の 4 段階で評価した。4.の準備学習に要した総時間を回答する項目は、「1: 0-19 分」、「2: 20-39 分」、「3: 40-59 分」、「4: 60 分以上」とした。授業評価結果の小項目（設問別）平均値を表した図は、「1～4」段階でのレーダーチャートへと変更した。自由回答項目では、教員のハラスメントを含めた教員の学生への対応や科目の内容・担当教員に関する内容について、自由に記載できるようにした。

1. 学生の実施状況

登校による対面授業、講義内容に応じた遠隔講義を実施する中での評価を実施した。科目責任者に対して科目の最終授業日に授業評価の依頼を行ったが、授業評価率を向上させるために授業評価の目的・意義を含め、授業評価の依頼を数回 e-portfolio によるお知らせ機能を通して通知し、更に、1 年から 3 年まで、学年のクラス委員に協力を依頼し、学生への連絡等をおこない入力率の向上を図った。8 月時点で回答率が 21%で、メールおよび e-learning のメッセージや e-portfolio からのお知らせ機能を用いて、繰り返し授業評価回答に関する連絡を行った。

結果、51 科目の授業評価の実施率は全体で 34.8%だった。実施率 10%以下の科目は 7 科目だった（免疫学、疾病治療学Ⅱ・Ⅲ、生命倫理学、病理学、社会福祉学、微生物学）。学年別の内訳は、1 年生 18 科目で 50.5%（2022 年度 50.2%）、2 年生 17 科目で 22.0%（2022 年度 30.8%）、3 年生 14 科目で 27.4%（2022 年度 36.4%）、4 年生 2 科目で 39.3%（2021 年度 44.0%）だった。昨年度は全科目で 40.7%の実施率であり、本年度はさらに実施率が低下した。

2. 評価結果

1. 大項目平均値

大項目の平均値は 3.70 (SD=0.58) で、昨年度より平均値が増加した (2022 年度 3.51, SD=0.66). 質問項目 1.授業の改善計画の実施は 3.71 (SD=0.53) だった. (2022 年度 3.50, SD=0.59). 2.授業の技法が 3.74(SD=0.50)で、昨年度に比して評価が高かった (2022 年度 3.54, SD=0.57). 3.授業の内容が 3.74 (SD=0.49) で昨年度に比して評価が高かった (2022 年度 3.54, SD=0.57). 4.自身の学習態度が 3.54(SD=0.81)で昨年度に比して評価が高かった (2022 年度 3.33, SD=0.92). 5.授業での ICT の活用が 3.70 (SD=0.58) で昨年度に比して評価が高かった (2022 年度 3.61, SD=0.53).

全ての設問の平均値は、高い順に 1 年, 2 年, 4 年, 3 年の順であった (2022 年度 2 年, 1 年, 4 年, 3 年の順). 以下、学年別に授業評価結果を記した.

(1) 1 年生

全体が 3.73 (SD=0.59) で昨年度に比べ評価が高かった (2022 年度 3.50, SD=0.66). 各評価項目別で大項目平均値を述べる.

授業の改善計画の実施は、3.76 (SD=0.54) で昨年に比して評価が高かった (3.54, SD=0.55).

授業の技法が 3.78 (SD=0.49) で昨年に比して評価が高かった (3.55, SD=0.54).

授業の内容が 3.82 (SD=0.42) で昨年に比して評価が高かった (3.56, SD=0.55).

自身の学習態度が 3.51 (SD=0.87) で回答に個人差がある項目だが、昨年に比して評価が高かった (3.25, SD=0.97).

授業での ICT の活用状況は 3.73 (SD=0.57) で昨年に比して評価が高かった (3.58, SD=0.53).

(2) 2 年生

全体が 3.72 (SD=0.57) で昨年度に比べ評価が高かった (2022 年度 3.55, SD=0.66). 各評価項目別で大項目平均値を述べる.

授業の改善計画の実施は、3.74 (SD=0.51) で昨年に比して評価が高かった (3.54, SD=0.57).

授業の技法が 3.74 (SD=0.51) で昨年に比して評価が高かった (3.57, SD=0.60).

授業の内容が 3.72 (SD=0.56) で昨年に比して評価が高かった (3.59, SD=0.59).

自身の学習態度が 3.60 (SD=0.73) で回答に個人差がある項目だが、昨年に比して評価が高かった (3.38, SD=0.89).

授業での ICT の活用が 3.82 (SD=0.39) で昨年に比して評価が高かった (3.54, SD=0.56).

(3) 3 年生

全体が 3.63 (SD=0.58) で昨年度に比べ評価が高かった (2022 年度 3.29, SD=0.57). 各評価項目別で大項目平均値を述べる.

授業の改善計画の実施は、3.61 (SD=0.52) で昨年に比して評価が高かった (3.08, SD=0.57).

授業の技法が 3.67 (SD=0.52) で昨年に比して評価が高かった (3.23, SD=0.57).

授業の内容が 3.62 (SD=0.54) で昨年に比して評価が高かった (3.13, SD=0.5).

自身の学習態度が 3.53 (SD=0.76) で昨年と同様の評価だった (3.56, SD=0.56).

授業での ICT の活用が 3.74 (SD=0.46) で回答に個人差がある項目だが、昨年と比して評価が高かった (3.44, SD=0.55).

(4) 4 年生

全体が 3.66 (SD=0.56) で昨年度に比べ評価が高かった (2022 年度 3.47, SD=0.65). 各評価項目

目別で大項目平均値を述べる。

授業の改善計画の実施は、3.60 (SD=0.49) だった。で昨年に比して評価が高かった (3.44, SD=0.55)。

授業の技法が 3.71 (SD=0.50) で昨年に比して評価がわずかに低かった (3.37, SD=0.56)。

授業の内容が 3.68 (SD=0.48) で昨年に比して評価が高かった (3.47, SD=0.55)。

自身の学習態度が 3.53 (SD=0.77) で回答に個人差がある項目だが、昨年に比して評価が高かった (3.41, SD=0.79)。

授業での ICT の活用が 3.74 (SD=0.44) で昨年に比して評価が高かった (3.44, SD=0.61)。

2. 科目区分別大項目平均値

科目区分別では、教養教育科目と看護専門科目の平均値を以下に記した。教養教育科目と看護専門科目の科目区分の平均値を比較すると、授業改善計画の実施、授業の技法、授業の内容の項目以外、自身の学習態度、ICT の活用状況の 2 項目で、看護専門科目が基礎教養科目より評価が高かった。

(1) 教養教育科目

平均値は、全体が 3.72 (SD=0.63) で、昨年度と同等の評価であった (2022 年度 3.48, SD=0.67)。

各評価項目別で大項目平均値を述べる。

授業の改善計画の実施は、3.78 (SD=0.55) で昨年に比して評価が高かった (3.52, SD=0.58)。

授業の技法が 3.77 (SD=0.52) で昨年に比して評価が高かった (3.53, SD=0.55)。

授業の内容が 3.80 (SD=0.48) で昨年に比して評価が高かった (3.53, SD=0.56)。

自身の学習態度が 3.50 (SD=0.88) で回答に個人差がある項目だが、昨年に比して評価が高かった (3.23, SD=0.98)。

授業での ICT の活用が 3.73 (SD=0.62) で昨年度に比して評価が高かった (3.58, SD=0.55)。

(2) 看護専門科目

平均値は、全体が 3.69 (SD=0.56) で昨年度に比して評価が高かった (2022 年度 3.52, SD=0.65)。

各評価項目別で大項目平均値を述べる。

授業の改善計画の実施は、3.68 (SD=0.52) で昨年に比して評価が高かった (3.50, SD=0.59)。

授業の技法が 3.73 (SD=0.49) で昨年に比して評価が高かった (3.53, SD=0.55)。

授業の内容が 3.71 (SD=0.50) で昨年に比して評価が高かった (3.54, SD=0.58)。

自身の学習態度が 3.56 (SD=0.77) で回答に個人差がある項目だが、昨年と比して評価が高かった (3.37, SD=0.89)。

授業での ICT の活用が 3.76 (SD=0.44) で昨年に比して評価が高かった (3.62, SD=0.52)。

3. 小項目の平均値

(1) 学年別

学年別で平均値が 3.0 を越えなかったのは、「自身の学習態度」4.自身の学習時間の時間数回答の項目であった (2.84, SD=1.13)。以下に学年別を述べる。

1 年生は平均値が 2.58 で、「1: 0-19 分」が 22.0%, 「2: 20-39 分」が 28.5%, 「3: 40-59 分」が 19.2%,

「4: 60 分以上」が 30.2%だった。

2 年生は平均値が 3.28 で、「1: 0-19 分」が 8.2%, 「2: 20-39 分」が 14.8%, 「3: 40-59 分」が 18.0%, 「4: 60 分以上」が 59.0%だった。

3 年生は平均値が 3.03 で、「1: 0-19 分」が 12.2%, 「2: 20-39 分」が 20.6%, 「3: 40-59 分」が 19.2%, 「4: 60 分以上」が 48.1%だった。

4 年生は平均値が 2.63 で、「1: 0-19 分」が 10.0%, 「2: 20-39 分」が 40.0%, 「3: 40-59 分」が 26.7%, 「4: 60 分以上」が 23.3%だった。

2 および 3 年生の半数は、60 分以上の主体的な自己学習時間をとっていた。

(2) 科目別

科目別でも平均値が 3.0 を越えなかったのは、「自身の学習態度」4.自身の学習時間の時間数回答の項目であった (2.84,SD=1.13)。以下に科目別を述べる。

教養基礎科目は平均値が 2.52 で、「1: 0-19 分」が 23.2%, 「2: 20-39 分」が 27.0%, 「3: 40-59 分」が 24.6%, 「4: 60 分以上」が 25.3%だった。

看護専門科目は平均値が 3.01 で、「1: 0-19 分」が 12.7%, 「2: 20-39 分」が 22.5%, 「3: 40-59 分」が 16.5%, 「4: 60 分以上」が 48.3%だった。看護専門科目に関する自己学習に、より多くの時間を割いて主体的に学習していた。

4. 教員による講評と授業改善計画

授業評価を実施した 51 科目中、28 科目の科目責任者からの回答を得た。科目責任者へは、1 月 30 日に授業評価結果の閲覧方法と入力依頼をおこない、入力の期日を 2 月 28 日として連絡した。

講評については、大項目平均値の高値、低値の項目、小項目平均値が低迷している項目、低評価回答者の存在、小項目平均値が高値の項目について、また関連する自由記載内容を踏まえて、丁寧に振り返っていただき、その原因を科目の中で分析し、ご回答いただいた。

授業改善の提案は、評価が低い小項目や評価が高い小項目に対して、自由記載内容を踏まえて、次年度講義の改善点について具体的にご回答いただいた。

自由記載欄の 2 項目より、ハラスメントをはじめとする教員からの学生への対応については、問題事象に関連する回答はなかった。科目責任者からは、オムニバス科目における授業改善計画への回答方法の改善、科目責任者からの講評・授業改善計画への回答期日の延長などの要望があり、今後の検討事項としていく。

5. 考察

授業評価は、より良い授業と教育環境の実現を目指し、全科目で学生による授業評価を実施している。科目責任者および担当教員へは、看護学教育における自己点検・評価の PDCA サイクルに必要な資料として位置づけられていることを説明し、授業評価の内容を精読いただき、授業評価結果に対する授業の講評と、改善計画について回答をいただいた。

学生による授業評価の回答率は、講義の中で評価時間を設けていただくよう科目責任者へご案内しているが、例年、回答率が低い科目が多くなっている。昨年度と同様に、様々な方法を用いて評価回答への

協力を発信したが、回答率が低下した。学年毎に講義や実習が終了する期間も多様で、学年全体で登校するのは定期試験の機会しかなく、時間を取って授業評価に回答する時間を確保できない状況もある。また、学生を対象にした調査が他にもあり、調査回答への依頼や、回答リマインドが発信されても、重要な調査に積極的に回答する行動がとれないことが予測される。回答やりマインドメールに疲弊していることも、授業評価の回答率が上がらないことの要因として考えられる。継続して、講義中に授業評価の告知と回答時間の確保を、科目責任者へ依頼するとともに、授業評価への回答への促進を学年に働きかけ、学生の主体的な参加を促すように取り組んでいく必要がある。

授業評価の内容については、20 項目中、学習時間を問う項目以外は、平均して 3.7 前後の評価がされており、概ね良好な評価だった。昨年度は平均値が低かった「授業の技法」は、平均値 3.74 と高い評価となり、登校授業が増え、「教授方法」の改善が図れたことが、予想される。

学年毎では、2 または 2,3 年生による回答平均値が例年と同様に低かった。要因を十分に分析することは難しいが、演習科目が多く授業評価実施のための時間を十分に確保できなかった可能性があり、次年度以降の傾向も注視していく必要がある。

6. 総括

2023 年度前期科目の授業評価は回答率が低かった。早期から学年のクラス委員と FDSD 委員が協働し、授業評価への回答をスムーズに回収できるよう連携して学生へ働きかける。

科目責任者による授業評価結果の閲覧、講評と次年度の改善計画の入力依頼を郵送からメールに変更し、閲覧方法と入力方法のガイドを合わせて添付した。科目責任者自身の ID と PW で e-learning システムへアクセスし、授業評価を閲覧する方法に関しては問い合わせがなかった。依頼から回答期日までの期間も長めに設定したうえ、メールでの依頼にしたため、入力期日に関する意見はなかった。ただ、回答数が少ないため、講評をするにも難しいという意見が散見された。意見をいただいた先生へは個別に対応を行うことでスムーズな入力をいただけた。

教育センターは e-learning システム全体を運用する機能であることから、授業評価は学科内での対応が必要となった。学事課委員が e-learning に不慣れなことで、授業評価の対象となる委員教員（松永、清水、中島）で対応した。次年度は e-learning システムを介さず回答可能なシステム構築を早急に検討する必要がある。

2024 年 5 月 30 日

FD・SD 委員会

2023 年度は e-learning システムを利用し、学生による授業評価を前期および後期で実施した。後期及び通年科目は全 74 科目が対象だった。教育センターによる e-learning コース設定は授業評価アンケート項目のみで、それ以降の行程を FD・SD 委員が担うこととなった。一部、業者にデータ分析を依頼し、科目別結果表を作成してもらっているが、科目責任者への結果の公表、講評と次年度の改善計画の回答を回収する行程も委員で担うこととなった。

1. 授業評価の方法

授業評価は、学生が各自の e-learning へログインし、2023 年度授業評価のコースへアクセスし、受講する科目の評価項目に回答した。科目責任者である教員へは、授業評価回答の URL (QR コード) を共有し、実施率向上を鑑み講義内で授業評価時間を確保するよう依頼した。

授業評価アンケートの項目は計 20 項目で、「1.授業の改善計画の実施」に関する 1 項目、「2.授業の技法」に関する 6 項目、「3.授業の内容」に関する 6 項目、「4.自身の学習態度」に関する 4 項目（うち 1 項目は準備学習の時間数の回答）、「5.授業での ICT の活用状況」に関する 3 項目とした。回答項目は、「1: まったくそう思わない」、「2: あまりそう思わない」、「3: ある程度そう思う」、「4: 非常にそう思う」の 4 段階で評価した。4.の準備学習に要した総時間を回答する項目は、「1: 0-19 分」、「2: 20-39 分」、「3: 40-59 分」、「4: 60 分以上」とした。教員のハラスメントを含めた教員の学生への対応や科目の内容、担当教員に関する内容については自由記載欄を設けて、回答できるようにした。

2. 学生による授業評価実施状況

登校による対面授業、講義内容に応じた遠隔講義を実施する中で評価を実施した。科目責任者へは、科目の最終授業日に授業評価の依頼を行った。また、学生へは授業評価回答率向上のために授業評価の目的・意義を含めた依頼を e-learning 及び e-portfolio より複数回通知した。1 月時点の回答率が 18.1% であり、学年クラス委員と協働し、1 年から 3 年まで定期試験終了後に評価入力を依頼した。更に、3 月 1 日の e-portfolio 賞授賞式後、3 月 4 日までの回答期日として、全学年へ授業評価入力の依頼を通告した。その結果、通年および後期 74 科目の授業評価実施率は全体で 24.0%であった。うち選択科目 8 科目において授業評価回答が 0%であったため、当該科目責任者へは、次年度科目運営時の授業評価実施方法・タイミングの再考を依頼した。

学年別の内訳は、1 年生 38 科目で 28.3% (前年度 50.2%)、2 年生 22 科目で 20.8% (前年度 30.8%)、3 年生 2 科目で 3.3% (前年度 36.4%)、4 年生 12 科目で 19.3% (前年度 44.0%) であり、回答率の高い順に 1 年、2 年、4 年、3 年であった。

前年度は前々年度より授業評価回答率が低い 40.7%であったが、本年度はさらに大幅低下した。回答項目数の圧縮ならびに学生・科目責任教員への度重なる周知活動等、多様な手段をもってもしても目標回答率 80%には及ばず、授業評価システムの抜本的な革新の必要性が示唆される。

3. 学生による授業評価結果

1) 学年別大項目における平均

全学年における全項目の平均は 3.54 (SD=0.68) であり、前年度より微かに高値であった (前年度 3.51, SD=0.66). 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.56 (SD=0.58), 「2.授業の技法」が 3.57 (SD=0.62), 「3.授業の内容」が 3.55 (SD=0.65), 「4.自身の学習態度」が 3.40 (SD=0.86), 「5.授業での ICT の活用」が 3.60 (SD=0.59) であり、授業運営における学生による評価において、概ね適当であると判断されたと考えられる.

全設問の平均値は高い順に 1 年, 4 年, 2 年, 3 年であった. 以下, 学年別に授業評価結果を記す.

(1) 1 年生

全項目の平均は 3.65 (SD=0.64) であり、前年度よりも微かに高値であった (前年度 3.50, SD=0.66). 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.73 (SD=0.49), 「2.授業の技法」が 3.70 (SD=0.58), 「3.授業の内容」が 3.71 (SD=0.56), 「4.自身の学習態度」が 3.43 (SD=0.63), 「5.授業での ICT の活用」が 3.71 (SD=0.56) であった.

(2) 2 年生

全項目の平均は 3.41 (SD=0.71) であり、前年度よりも微かに低値であった (前年度 3.55, SD=0.66). 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.39 (SD=0.65), 「2.授業の技法」が 3.35 (SD=0.65), 「3.授業の内容」が 3.41 (SD=0.69), 「4.自身の学習態度」が 3.34 (SD=0.74), 「5.授業での ICT の活用」が 3.47 (SD=0.61) であった.

(3) 3 年生

全項目の平均は 3.29 (SD=0.48) であり、前年度とほぼ同等であった (前年度 3.29, SD=0.57). 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.25 (SD=0.43), 「2.授業の技法」が 3.17 (SD=0.43), 「3.授業の内容」が 3.25 (SD=0.43), 「4.自身の学習態度」が 3.56 (SD=0.48), 「5.授業での ICT の活用」が 3.25 (SD=0.43) であった.

(4) 4 年生

全項目の平均は 3.43 (SD=0.69) であり、前年度とほぼ同等であった (前年度 3.47, SD=0.65). 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.35 (SD=0.58), 「2.授業の技法」が 3.46 (SD=0.61), 「3.授業の内容」が 3.33 (SD=0.71), 「4.自身の学習態度」が 3.43 (SD=0.73), 「5.授業での ICT の活用」が 3.57 (SD=0.56) であった.

2) 科目区分別大項目における平均

教養教育科目ならびに看護専門科目による科目区分別の状況として、各々の平均値を以下に記す. 教養教育科目において、質問項目「1.授業の改善計画の実施」は看護専門科目よりも微かに高値であり、看護専門科目において「4.自身の学習態度」は教養教育科目よりも高値であり、その他の 3 項目すなわち「2.授業の技法」「3.授業の内容」「5.授業での ICT の活用」は、いずれの項目も両者において同等であった.

(1) 教養教育科目

全項目の平均は 3.53 (SD=0.74) であり、前年度よりも微かに高値であった (前年度 3.48, SD=0.67). 以下の各項目でも昨年度に比して高い評価だった. 質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.63 (SD=0.57), 「2.授業の技法」が 3.58 (SD=0.70), 「3.授業の内容」が 3.57 (SD=0.70), 「4.自身の学習態度」が 3.34 (SD=0.67), 「5.授業での ICT の活用」が 3.57 (SD=0.69) であった.

(2) 看護専門科目

全項目の平均は 3.54 (SD=0.66) であり、前年度とほぼ同等であった (前年度 3.52, SD=0.65)。質問項目「1.授業の改善計画の実施」は 3.53 (SD=0.58), 「2.授業の技法」が 3.57 (SD=0.60), 「3.授業の内容」が 3.54 (SD=0.63), 「4.自身の学習態度」が 3.61 (SD=0.56), 「5.授業での ICT の活用」が 3.54 (SD=0.66) であった。

3) 小項目における平均

(1) 学年別

小項目において、学年別で平均値が 3.0 を満たさなかった項目を列挙する。3 年生は 2 科目における結果であるため解釈は限定されるが、授業に関する学習時間平均としては概ね、学年の進行に伴い主体的な自己学習時間が延長していることが考えられる。

1 年生では「4.自身の学習態度」内の「授業時間以外の準備学習の程度」に関する項目のみであり、「0-19 分」が 22.1%, 「20-39 分」が 26.5%, 「40-59 分」が 26.5%, 「60 分以上」が 25.0% であった。

2 年生でも 1 年生と同項目のみであり、「0-19 分」が 21.1%, 「20-39 分」が 22.4%, 「40-59 分」が 15.5%, 「60 分以上」が 41.0% であった。

3 年生では「2.授業の技法」内の「教員の説明のわかりやすかったか」に関する項目のみであり、「そう思わない」が 25.0%, 「そう思う」が 75.0% であった。

4 年生でも 1・2 年生と同項目の身であり、「0-19 分」が 18.7%, 「20-39 分」が 18.7%, 「40-59 分」が 21.3%, 「60 分以上」が 41.3% であった。

(2) 科目別

小項目において、科目別で平均値が 3.0 を満たさなかった項目は、「4.自身の学習態度」内の「授業時間以外の準備学習の程度」に関する項目のみで、看護専門科目で自己学習時間が長い傾向にあった。

教養教育科目では、「0-19 分」が 23.9%, 「20-39 分」が 33.3%, 「40-59 分」が 20.3%, 「60 分以上」が 22.5% であった。看護専門科目でも同項目のみであり、「0-19 分」が 20.5%, 「20-39 分」が 21.3%, 「40-59 分」が 22.3%, 「60 分以上」が 36.0% であった。

4) 自由記載における回答

自由記載内容より、ハラスメントをはじめとする「教員の学生への対応」については、問題事象に関連する回答はなかったが、個々の科目において学生からの具体的な要望を求める記述もみられた。

3. 教員による講評と授業改善計画

後期及び通年科目 74 科目の授業評価を実施し、学生からの授業評価が 0 件 (0%) だった 8 科目以外の 66 科目で、授業評価結果を科目責任者へ授業評価結果を開示した。e-learning のアンケート機能と、Google フォームを用いて、授業評価の講評と次年度の改善計画について回答を得た。科目責任者へは 4 月 3 日付で授業評価結果の確認及び講評と改善計画の依頼を行い、入力期日を 4 月 30 日締切として連絡し、50 科目の科目責任者より回答を得た。更に、社会科学系と人文科学系科目の回答を 5 月 31 日まで延長し 2 科目の回答を得た。期日までに 2 回のリマインドメールを発信して回答への協力を依頼したが、

回答率は 75.6%にとどまった(2023 年度前期は 55.0%,2022 年度後期は 89.0%だった)。

講評については、大項目及び小項目において学年別平均及び区分別平均よりも低評価であった項目、ならびに高評価であった項目について、また関連する自由記載内容を踏まえて丁寧な振り返り、原因分析がなされ回答された。授業改善計画においては、とくに低評価項目に関して、次年度講義及び演習等の改善点が具体的に回答された。授業評価結果を総じて、自由回答でハラスメント事象は確認できなかったことに加え、学生からの意見に対して、教員の視点で教育的なフィードバックがなされ、改善を要する点については具体的に回答がなされていた。

4. 考察

学生による授業評価は、よりよい授業と教育環境の実現をめざし、全科目において学生による授業評価を実施したうえで、科目責任者を中心に講評及び改善計画を検討し次年度科目運営に反映させるものである。科目責任者および担当教員へは、看護学教育における自己点検・評価における PDCA サイクルに必要な資料であることを説明し、学生による授業評価内容の精読、授業評価結果に対する授業の講評と改善計画について検討し回答を得た。

学生による授業評価の実施については、講義最終回において評価回答時間を設けるよう科目責任者へ案内しているが、毎年回答率が低い科目が多くなっている。後期は前期と同様、さまざまな方法を用いて評価回答への協力を発信したが回答率が低迷した。後期は非常勤講師が担当する選択科目も多く、また通年科目もあり、定期試験が無い科目の授業評価も多い。さらに学年毎に講義や実習の終了時期が大きく異なり、授業評価回答のアナウンスや実施時間の確保が難しい状況もある。さらに年度末は他の重要調査も重なり（臨地実習アンケート、学生生活アンケート等）、調査回答への依頼や回答依頼のリマインドが発信されても、調査回答に疲弊した状況が鑑みられる。そして現行の e-learning システムを利用した回答形式では、順番に列挙されてはいるものの授業評価実施科目 74 科目分のトピックスから該当回答科目を探し出して回答しなければならない現状もあり、実施方法にも回答率低迷の要因があると考えられる。

次年度は、e-learning システムを使用した授業評価から、教育ソフトウェア社のシステムへ移行する。2024 年度の前期授業評価開始が 6 月中旬以降になるため、1-2 割の科目は最終講義を終えてしまう。現在も外注業者と授業評価回答率を上げるための仕組みづくりの折衝を行っている。科目責任者へは、引き続き、講義最終回で授業評価回答時間を確保し授業評価を実施していただく、もしくは授業評価への協力を依頼する時間を確保してもらうよう働きかける。また、7 月に、全学年のクラス委員に調整を依頼し、学事課もしくは FDSD 委員が同席して、集合して授業評価に回答してもらう日程を確保する。

授業評価結果に関しては、20 項目において学習時間を問う項目以外は平均して 3.5 前後の評価がされており、概ね良好な評価と考えられた。学年別の特徴としては、3 年生における回答の平均値が例年同様低かった。後期の大半が臨地実習期間であること、授業評価該当科目も 2 科目と少なく、回答率も低い。よって、平均値の低さの要因を十分に分析することは難しく、次年度以降の傾向を注視していく。

教員による講評と授業改善計画においては、医療総論などのオムニバス科目や看護研究など担当者が異なる科目の授業評価実施について意見が散見されたが、学生の重要な声を抽出する機会ともなっている。選択者数が少ない科目の授業評価実施率も低迷しているため、2024 年度以降は、社会科学系と人文科学系の科目は、科目責任者のみに授業評価を依頼することとなっている。授業評価の実施の意義や、アンケート項目の見直し、実施方法を含め、カリキュラム委員会と協働し、検討する。